

2025年6月15日 第二礼拝 あけぼの幼稚園創立感謝
説教題「希望の門」ヨハネ福音書10章7～10節

主任牧師 加藤 誠

「わたしは門である。わたしを通して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。」「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。」(ヨハネ福音書10:9、10)

76年前、焼野原が残る大井町に最初の園児15名を迎えて大井バプテスト教会附属あけぼの幼稚園の働きはスタートしました。戦後まもなく着の身着のままで遊ぶ子どもたちの姿に、初代牧師の大谷賢二先生は「愚かな戦争をキリスト教は止めることが出来なかった。キリスト教がもっとしっかりと、聖書の愛と正義に基づき平和をつくりだす人材の育成を！」というビジョンを示されたのです。ですから平和に仕える使命と切り離されたあけぼの幼稚園はありません。「どんな時代にも聖書の愛と平和、正義の御言葉に固く立つ」使命を教会として心していきたいのです。

さて、今朝は「わたしは門である」という主イエスの御言葉を通してあけぼのの使命と働きを思い巡らしたいと思います。あけぼの幼稚園にも門があります。園長の日々の唯一の仕事と言っているのが、朝この門の前に立って園児と保護者を迎えることです。門には、第一に子どもたちを守る役割があります。羊飼いは羊たちを守るために夜は門のところに横たわって寝たそうです。狼が門を破って中に入ることがないように羊飼い自身が身を挺して門をまもったのです。

一方で、門には初めて幼稚園を訪ねてきた親子を最初に迎え入れる役割があります。今年のゴールデンウィーク、初めて行った新宿の映画館の入り口が分からず戸惑っていると、案内の人が立っていて「ここが入り口か！」と分かり安心しました。無人の門ではなく、そこに人が立って「ようこそ！」と歓迎してくれる。日曜日の教会学校の時に門の前に立って子どもたちを迎える奉仕者を大井教会は昔から立ててきましたが、「朝、門の前で一人ひとりを迎える」、ここから教会学校は始まっている。あけぼの幼稚園や大井教会が大切にしてきた主イエスのマインドがそこにあるのです。

また門は、まだ幼稚園に慣れていない小さな子どもにとっては大きな緊張が伴う場所のようです。門を見た途端にお父さんやお母さんにしがみついて泣きだす子がいます。この門に入るとお父さんお母さんと離れなければならない、甘えたの自分ではいられなくなる。門は家庭と幼稚園とを分ける境界線のようなもので、そこをくぐって新しい出会いに飛び込むことで、新しい自分に成長していく境界線でもあるのです。

ところで「わたしは門である」という時の門という漢字は、何となく立派なお屋敷の門をイメージしますが、英語の聖書を見ると “I’m the gate.” “I’m the door.” となっています。日本語の門よりも、すぐそばにある身近なニュアンスですね。ゲー

トと聞くと空港の搭乗ゲートを思います。搭乗ゲートごとに行き先がまったく違うのできちんと確認しないとなりません。以前、外国の空港であやうくゲートを間違えそうになり慌てたことがありました。またドアということでは、あるドラマで天国につながるドアと地獄につながるドアがあり、天国につながると思われたドアに押し寄せた人たちが、ドアを開けた途端、奈落の底に落ちていく場面がありました。私たちが生きている世界には、とても魅力的に見えて実は人を転落させ破滅させる怪しいドアがたくさんあります。ですから、私たちはよくよく確かめなければなりません。

ではイエス・キリストというドアはどういう門なのでしょう。今朝の箇所です。主イエスは「そこを通る者は救われ、牧草を見出し、豊かに命を受ける」と言われています。主イエスのドアは、私たちを豊かな命に導く門であり、命の世界の入り口として一人ひとりの名を呼んで迎え入れる役割をしているということでしょう。

先週まで大井教会の聖書日課は使徒言行録でした。サウロは主イエスと出会うまでは「敵対する者は殺して構わないという、殺意と憎しみの世界」に生きていました。今のガザに対するイスラエルのように、自分と異なる価値観、宗教観を持った人に対して憎悪を向けていく世界です。そのサウロがイエス・キリストという門と出会い、「サウロ、サウロ」と呼びかける声を聴いて、その門をくぐる者とされた時、彼は「敵のために祈る世界、敵に見える人たちとも一緒に生きる世界」に移されていきます。そのようにイエス・キリストという門は、人を百八十度変えて、死の滅びの世界から命の世界に移す力をもつ「希望の門」です。また 16 節以下を読むと、囲いの外の羊（異なる人々）を招き入れて「一つの群れ」に導く、そういう「希望の門」でもあります。

「東京望みの門」という「ミッドナイトミッション」をしているキリスト教の団体があります。「真夜中の宣教」という意味で「夜の仕事しながら働かざるを得ない女性たちをサポートする働き」のことですが、この「望みの門」という名前はホセア書 2 : 17「そのところで、わたしはぶどう園を与え、苦悩の谷を希望の門として与える」からつけられたものです。一人で背負うには重すぎる重荷を抱えて生きる人が安心してその苦悩を下ろし、明日に向かう希望をもってその門を出ていくことを祈る働きは、まさにイエス・キリストの「希望の門」としての働きでしょう。

今、あけぼの幼稚園に通う子どもたちがこれから育つ時代を考えると、子どもたちにも保護者の方たちにも、イエス・キリストという「希望の門」と出会っていただきたいと願います。どの道を行ったらよいか迷っている私たち一人ひとりの名を愛を込めて呼んでおられる方と出会い、その門を出入りすることで日々豊かな命を受け、明日を生きる力と希望を受け取っていただきたい。そして、毎日、毎週の日曜日その子どもたちと保護者を迎える私たち自身が、聖書の御言葉の養いを受けて、聖書からいただく命と希望をしっかりと受けていきたいと願います。